

# 編集後記

▼新しい学習指導要領が小・中学校で実施されて三か月が経ちました。学校の週五日制、「総合的な学習の時間」の新設、教科時数の減少、少人数授業の導入等、子どもの学力にかかわる問題を大きく引きつりながらとにもかくにも動きだした感があります。

▼岩川直樹さんの論文「学びの場の編み直し」は、「生きる力」が足りないから「総合学習」を「学力が心配」だから「少人数授業」をではなく、問題はそこにどんな学びの場が一貫して志向されているかだと指摘し「役場」「市場」「広場」になぞらえて明快に問題提起をしています。「総合学習」を真の「学びの広場」にするためには何が必要かも具体的に提示しており、現場の先生たちに大きな示唆を与えてくれるでしょう。

▼金森俊朗さんの「私たちは奇跡的存在」は、「日常の学習の充実と子どもが求めている課題と丁寧に結合した学びの創造」が自身の自身の課題だとして取り組んだ、すぐれた総合学習実践の記録です。

▼県内でも「総合的学習」の模索はさまざまに試みられています。目黒和男さん（小学

校）、和澄利男さん（中学校）の実践を紹介しました。いくつかのヒントを与えてくれたのではないのでしょうか。

▼小学校低学年の三〇人学級が実現したことは大きな収穫ですが、教員の枠を基本的には増やさない施策が学校現場に困惑をもたらしています。また少人数授業を可能にする措置もとられましたが、この施策は「習熟度別指導」を前提としているため大きな問題点を抱えています。本山文雄さん（小学校）、三ツ井富士夫さん（高校）にその実態を紹介してもらいました。岩川さんがいう「学び合いの場づくりの視点」からの現場の苦悩が伝わってくる報告です。

▼かつて新潟大学にいらした糟谷憲一さんには、文科省がすすめている「大学改革」の現状と問題点、さらに大学教育の充実と学術研究のつりあいのとれた発展をめざすにはどういう改革が必要なのかを述べていただきました。山岸堅磐さんの「長野県政と「信州の教育と自治研究所」」と、柿沼昌芳さんの「東京の『主幹』制度」は明暗を分けた行政の施策。ともに会員制教育研究所全国交流研で報告されたもの。金森さんから玉稿をいただけたのも研究所交流の賜ものです。松山雄二さんは前ビッグスワン管理事務所長。ワールド

カップで湧く新潟スタジアムを陰で支えてきたご苦労がにじんでいます。立石由美さんは前回に次いでドイツの徹底した「環境教育」を紹介。県内各地でも直接関係してきます。山問題は教育問題にも直接関係してきます。山本勝一さん、小島寿夫さんの論者をぜひ参考に。上越春日中いじめ自殺事件判決の問題点を近藤明彦さんに指摘していただきました。（片岡弘）

## にいがたの教育情報 NO. 70

2002年6月20日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX (025) 228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。